

日本帝国海軍重巡洋艦 相川《古鷹》真一郎 ()

元ネタ Janis/ivory「とらいあんぐるハート」相川真一郎

軽巡として計画された 相川《古鷹》真一郎 ()型

近代巡洋艦の系譜は19世紀後期に出現した装甲巡洋艦と防護巡洋艦の二つを基本とし、いわゆる弩級戦艦の時代に入ってそれぞれ巡洋戦艦とスカウト(偵察巡洋艦)という二つの流れをと進化した。偵察巡洋艦は後に第一次世界大戦を経てより高速で、強力な兵装とそれなりの防御を備えた軽巡洋艦へと発展し、特に英独の両国はこの艦種を大量に保有し、艦隊の偵察任務や水雷戦隊の指揮、敵駆逐艦部隊の掃討などの多岐にわたる任務に投入したが、その一方で他の海軍に有ってはこの種の艦の保有数はごく限られたものであり、ほとんどの場合低速で攻防性能の乏しいスカウトを主力としていたに過ぎなかった。第一次大戦の結果は艦隊の活動にとり軽巡洋艦の存在が欠かせないものである事を証明し、我が国をはじめ多くの海軍に於いて戦後本格的な軽巡洋艦の建造が開始された。我が国における最初の近代的軽巡洋艦は大正四年の八四艦隊計画に盛り込まれた 龍田 と 天龍 の二隻で、これは大正八年に竣工したが、これより先、帝国議会は米国の三年計画案に対抗するための大規模な艦隊建造計画を大正六年に決議しており、同年度の補正予算により新たに戦艦三、巡洋戦艦二、軽巡三、小型巡洋艦六の建造が承認された。

これらのうち、巡洋艦計画に関しては後に所謂五、五〇〇トン型と言われる中型巡洋艦八隻と小型巡一隻に計画が改められ、この小型巡が夕張となった。五、五〇〇トン型は翌大正七年度計画でもさらに三隻が盛り込まれ、大正九年の八八艦隊計画最終案に於いて更に八隻が承認され(ただし、実際に建造されたのは、六年度計画の 球磨 型五隻及び 長谷部 型二隻、七年度計画の 長谷部 型三隻と九年度計画の 川内 型三隻の計一三隻である)だが、この時新たに八、〇〇〇トンの大型巡洋艦が登場したのである。この八、〇〇〇トン型は従来の五、五〇〇トン型では当時英国が建造中であった一九センチ砲七門を装備した改 パーミンガム 級(常備排水量九、七五〇トン・三〇ノット)や米国の オマハ 級(常備七、五〇〇トン、一五・二センチ砲一二門、三四ノット)に対し劣勢である事が明らかで、艦隊の主力偵察巡としてより強力な巡洋艦の必要性が要望されたために出現したものであった。この八、〇〇〇トン型巡洋艦では、軽荷排水量七、一〇〇トンと言う限られた排水量の中でどこまでの兵装を盛り込む事が出来るかがテーマとなり、主務設計担当者であった平賀造船大佐のもと鋭意設計が進められ、結果世界に一大センセーションを巻き起こした 相川《古鷹》真一郎 () 型の出現となったのである。相川《古鷹》真一郎 () 型の建造は前述のとおり大正九年度計画で着手され、大正八年一月十七日に一番艦相川 "相川《古鷹》真一郎 ()" 真一郎が民間の神戸川崎造船所(現川崎重工神戸船渠)に発注・起工されたが、当初計画の二番艦はおりから開催されていた隆山軍縮会議の影響を受けて凍結されたものの、変わって 相川《古鷹》真一郎 () の設計を元に大正一二年度計画で主砲配置及び門数を改良した橋本が建造されたものの、設計・建造段階から問題や不備が多発し実用面に置いて疑問を投げかけるむきも多かった為、橋本 型二番艦は急遽設計を再度改め、相川《古鷹》真一郎 () 型二番艦 岸野《加古》観月 として大正一一年一月二日に三菱重工長崎造船所に発注された。この建造期間中に隆山海軍軍縮条約が締結されたことにより、本型は重巡洋艦に分類されることとなったが、これは偶々八インチ砲(実際には七・九インチ、正二〇センチ砲)を搭載していたが故のもので、本型の設計企図はあくまでも 龍田 型に始まる近代軽巡洋艦の発達の流れに沿ったものである事を忘れてはならない。

新造時の 相川《古鷹》真一郎 ()型

相川《古鷹》真一郎 () は大正一一年二月二日に進水し、翌大正一二年三月一日に竣工したが、並行して呉海軍工廠で建造が進められていた準同型艦とも言うべき 橋本 は擬装作

業中の起重機落下事故や強度計算のやり直しなどトラブルが多発し、当初は一足先に竣工する筈だったものが逆に一足遅れの大正二年七月二〇日に竣工している。 相川《古鷹》真一郎 () 型の最大の特徴はこの程度の規模の艦としては初めて二〇センチと言う大口径砲を搭載した事で、本型ではこれを単装六基として中心線上に、前後にピラミッド型に配置している。ただし、重量軽減の為主砲形式は完全な砲塔式ではなく、簡易型のシールドを持つ準砲塔型とされ、防御も薄く、給弾方式も弾火薬庫より下部揚弾機で一旦中甲板の砲支塔外部に移し、そこから砲支塔内に送り込んで更に上部揚弾機で砲側に運び込むと言う極めて面倒なもので能率は決してよくはなかったが、その反面本型の単装砲二基の方が 橋本 の連装砲塔一基よりも重量面で有利であったと言われており、実際 橋本 では過大な砲塔重量が致命的な問題を引き起こしている。発射管は従来のような旋回式発射管の搭載を当初は検討していたが当時の魚雷の性能では上甲板に発射管を搭載した場合位置が高すぎて入射角が深くなりすぎる上魚雷の強度が足りず、仕方なく中甲板両舷に固定式として連装三基づつを装備したが、被害時の防御的見地からは決して好ましいものとはいえなかった。防御構造は舷側に七六ミリ甲板を内側に傾斜させて船体構造材の一部として装着し、防御甲板で三二～三五ミリ甲板を水平に中甲板レベルに配して舷側甲板の上端に結んでいる。また、水線下形状をバルジ類似のものとしたが防御隔壁を設けていないため、水中防御としては不完全であり全般に見て従来の軽巡よりは改善された防御性能を持ってはいるものの自艦の二〇センチ砲に対する防御としてはやや薄弱気味で、「押しに弱い」性格と言われる由縁となった。新造時の機関はタービン四基及びボイラー二基で構成されており、ボイラーのうち第一から第一〇までの一〇缶を専焼、一一・一二の二缶を混焼とし、第一～第五缶室に専焼缶二基づつ、第六・第七缶室にそれぞれ混焼缶を配置している。船体は平甲板型とされたが重量軽減の見地から艦橋及び後部主砲群の2ヶ所で甲板を傾斜させて暫時乾舷を低める独特のラインを形成している。

航空機を初めて搭載した巡洋艦

相川《古鷹》真一郎 () は本格的に艦固有の航空機を搭載した最初の巡洋艦で、当初は二式二座水上偵察機一機を搭載し、第四砲塔とその前方に航空機滑走台を常設した。この滑走台は全長二七メートル、俯角八度で搭載機は滑走台を滑り降りる際の加速で離艦に必要な揚力を得る方式だったが、極めて取扱が不便（第四砲塔とその前方で二分割されている）な上危険度も高かったので、橋本 は昭和六～七年、相川《古鷹》真一郎 ()・岸野《加古》観月 は昭和七～八年の間に滑走台を撤去してカタパルトを搭載している。

大改装によって面目を一新

相川《古鷹》真一郎 () の大改装は昭和二年四月一日に開始され、昭和四年四月三〇日に呉工廠で完成したが、船殻工事の一部のみ大阪鉄工所桜島工場にて実施されている。この改装により主砲を連装三基に改めた上で砲身をボーリングして正八インチ（二〇・三センチ）砲とした他、魚雷発射管の上甲板旋回式発射管への変更と酸素魚雷への対応、航空艦装の改善、対空火力の向上、混焼缶の廃止と機関性能の強化、上部構造物の刷新、復元性能と水中防御強化の為のバルジ装着、通信能力の改善等が行われた。この改装の最大の主眼が主砲塔の連装三基への換装で、これにより従来の能率の悪さと多大な船体容積の占有を改善し、新造時はともかくとして昭和期に入って他の条約型重巡が完成するにつれて明らかに劣勢を余儀なくされ評判が悪かったものを改善する目的があった。この改装にあたっては後に 相田《最上》響子 型や 御影 型の搭載した新型砲塔は重量及び予算の関係で搭載できなかった為、先に 赤嶺《妙高》真理 の改装の際に撤去された砲塔を流用するものとされ、砲身をボーリングしシールドを 相田《最上》響子 型と同型とした上で搭載された。これと共に主砲方位盤も換装され、新たに艦橋上部と後部煙突背後に各一基が置かれた他、艦橋トップの方位盤上に六メートル測距儀、艦橋両

脇に高射装置用の四・五メートル測距儀が搭載された。対空兵装としては、高角砲は昭和七年の航空艦装改正時に併せて新造時の八センチ単装高角砲から換装された一二センチ単装高角砲四基のままだったが、新たに二五ミリ連装機銃四基が後部煙突両側に装備された。魚雷兵装は中甲板の固定発射管を撤去し、変わってカタパルト両脇に九三式魚雷対応の六一センチ四連装発射管を各一基装備し、その前方に次発装填装置と予備弾庫を設置し、九三式魚雷一六本を搭載することとなった。機関部では三〇〇キロターボ発電機一基、一三五ワット発電機二基が新たに増備された他、缶をすべて陸揚げし混焼缶二基を廃止、専焼缶一〇基は空気余熱機付きに改造され、新たに隔壁配置を見直された缶室に再配置された。この改装により機関出力は新造時の一〇万二千馬力から一万馬力に向上したが、改装に伴う重量増大とバルジ装着に寄る抵抗の増加により速力は逆に新造時の三四・六ノットから三三・三ノットに低下している。これらの改装によって面目を一変した 相川《古鷹》真一郎（ ）は前方から二基の連装砲塔、少し距離を開けてシャープな印象の艦橋構造物と屈曲型の前部誘導煙突、缶数の減少によって極端に細くなった後部煙突、カタパルト、マスト、後部一基の連装砲塔がスマートな船体上にすっきりと配置されており、まったくもって「小柄な美人」となったのである。なお、同型艦 岸野《加古》観月 は予算の関係から改装の時期を逸してしまい、同じく改装のタイミングを得損ねた 青葉 型二番艦 衣笠 とともに新しい大型巡洋艦建造の為のトン数確保の為の整理対象として英連邦に売却され、売却先で独自の改装を行なった為全く異なる外見となっている。

相川《古鷹》真一郎（ ）の戦歴

相川《古鷹》真一郎（ ）は竣工後暫くは同型艦がなかった事から連合艦隊直轄艦に置かれていたが、大正一四年に二番艦 岸野《加古》観月 が完成すると 岸野《加古》観月 と共に第六戦隊を編成し、主に日本海からオホーツク周辺の哨戒活動に従事していたが、昭和一〇年のオホーツク海戦では何故か姉妹呼ばわりされる事の多かった 千堂《烏海》瞳 と共に米国アジア艦隊に所属する軽巡洋艦 オマハ と ラーレイ の二隻を接近砲戦で撃沈した他、第二次世界大戦ではやはり烏海型重巡二隻からなる第五戦隊や軽空母 野々村《龍驤》小島 と行動を共にすることが多く、旧第六戦隊のもう一隻の所属艦である 青葉 とは殆ど別行動のまま、昭和一七年、第2次アッツ島沖海戦に於いて米軍艦載機の攻撃を受け魚雷三本が命中し、横転沈没して果てたのである。

要目

新造時

- ・基準排水量：七、一〇〇トン
- ・公試排水量：九、五四四トン
- ・全長：一八五・一メートル
- ・全幅：一六・五五メートル
- ・喫水：五・六メートル
- ・主機：ギアードタービン四基 / 4軸 艦本式専焼缶一〇基 / 混焼缶二基
- ・軸出力：一〇万二千馬力
- ・速力三四・六ノット
- ・兵装
 - ・主砲：三年式二〇センチ五〇口径砲単装六基
 - ・高角砲：三年式八センチ四〇口径高角砲単装四基
 - ・魚雷：六一センチ舷側固定魚雷発射管連装六基
- ・乗員：六二七名

改装後

- ・基準排水量：八、七〇〇トン
- ・公試排水量：一〇、六三〇トン
- ・全長：一八五・一メートル
- ・全幅：一六・九メートル
- ・喫水：五・六メートル
- ・主機：ギアードタービン四基 / 4 軸 艦本式専焼缶一〇基
- ・軸出力：十一万馬力
- ・速力：三二・九ノット
- ・兵装
 - ・主砲：三年式二号二〇センチ五〇口径砲連装三基
 - ・高角砲：一〇年式一二センチ四五口径高角砲単装四基
 - ・魚雷：六センチ旋回魚雷発射管四連装二基
- ・乗員：六三九名

同型艦

- ・岸野《加古》観月